

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE



vol. 60 2020年5月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

<http://nofence.jp/>

2020 年度 NOFENCEWeb 総会報告

去る5月9日(土)夜7時から9時半までWebで2020年度の総会を開きました。11名の方が参加されました。この時点で、はがきで総会議案につき、会員の方の了解如何の返事が届いていて、40名(半数)の方の了解するという意思が届いていたので、Web総会ではそのことを先ずご報告し、事務局長の木村亮さんの司会で、活動報告、活動方針案、会計報告の順に説明があり、質疑が交わされました。返信用のはがきに書かれていた意見・感想も一覧表にし、司会の木村さんがそれを画面にアップし、Webで参加された方全員がそれを承知する形で進行できました。大分からは房崎達夫氏、関西からは「ねぶくろ」氏、東京からは李選さん、きどのりこさん、林久美子さん、田平啓剛氏が世話人以外に参加されました。参加者は自己紹介、他己紹介もして、会員・世話人の相互理解ができました。「ねぶくろ」氏がNO FENCEの会計報告がキチンとしているとほめてくれたのが、望外の幸せでした。ハガキによる回答と、Web総会で、総会議案は承認されましたこと、ご報告いたします(小川晴久)。

追悼 李 英和さん

去る3月28日、RENK(「救え! 北朝鮮の民衆/緊急行動ネットワーク」)の李英和さんが逝去された。享年65。

1991年平壤の社会科学院に1年の予定で留学し、その報告を『北朝鮮 秘密集会の夜』として刊行し(1994年2月)

た。前年の1993年6月上記RENKという組織を立ち上げ、1994年2月に「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」が発足するのに力を貸して下さった。訃報を聞き、上記の報告書を再読してみた。まるで昨日書かれたような内容であった。

本書は1996年から文春文庫に入った。今回「文庫本のためのあとがき」を読んだ。李英和さんのお母さんは李英和さんのよき理解者であった。「お前のやっていることは間違っていないから」と。李英和さんはいつも北朝鮮の民衆のことを考えていた。1997年7月27日の「人道支援と独裁政権」という講演記録が手元にある(RENK 東京パンフレット1)。その末尾を下に引用したい。

李英和さん、上記守る会設立の時は本当にお世話になりました。ありがとうございました。

(小川 晴久)



1994年2月 クリスト教会のカバーより。

李英和さんの北の子どもたち想う気持

これまで、人道支援だけでなく、無条件の経済支援を在日朝鮮人は30年以上もやってきた。働いて、爪の先に灯をともし思いでためたお金で仕送りをしてきた。その結果、どうなりましたか。民主化しましたか。改革開放にむかいましたか。軟着陸のきざしでもありますか。良くなったどころか悪くなったじゃないですか。

あの国に対する無条件の支援は何の役にもたたないということが、30数年の実績で明らかになっているんです。この在日朝鮮人側の事実認識を日本も、アメリカも、国連も尊重すべきじゃないでしょうか。

在日側のこの辛い決断、独裁者に対する経済支援はどんな形でもしないという姿勢こそ、結局僕達が最も大切にし、行動の指針にすべきものじゃないかと思います。北の子ども達がかわいそうだからトウモロコシを送ればいい、1年といわず10年でも送ろう、という人には是非言いたい。北の子ども達はトウモロコシだけでは生きていけないんです。肉も魚もいるんです。服も、靴もいるんです。少なくともノートや鉛筆がちゃんとあって、学校で最低限の勉強をして、自由にもものを考えて、自由にしゃべれるようにならなくては、本当の意味で生きてはいけません。決してこのことを忘れてはいけません。 (了)

脱北者の講演や著作などを中心に、北朝鮮の人権侵害や収容所の姿は一般にも知られつつあります。しかし迫りくる臨場感をもってその実態に接するには、映画や小説という表現であればこそでしょう。

「千里眼シリーズ」などのミリオンセラー作家である松岡圭祐氏が、北の人権問題のキーワードともいえる独特の身分制度「出身成分」をそのままタイトルにしたサスペンス・ミステリーを書きおろしました。

保安署員（刑事）のアンサノは、平壤の郊外で11年前に起きた強姦殺人事件の再調査を命じられます。腐敗しきった保安署のなかでアンサノは、この事件が自身の出身成分にも関わる秘密を含んでいることに気づき、タブーである強制収容所に迫っていく…。

読み進めるにつれ、社会状況のあまりの荒唐無稽さに驚きつつも、そのリアリティに引き込まれていきます。それもそのはずで、著者自身が冒頭であらかじめ断わっているように、この小説は多くの脱北者の証言に基づいた事実を踏まえています。「非常に近いできごとが現実には報告されている」とのことです。

また、単に北の実態を描いてあるだけではなく、エンターテインメントとしても屈指の出来栄です。どんでん返しに次ぐどんでん返し。いったい真実はどこにあるのか。すべての伏線を回収するラストシーンに大きな感動を覚えたのは、支配体制を超えて人間らしく生きたい、そんな市井の人々の願いに著者が温かく寄り添っているからでしょう。

本作はおそらく将来、「独裁時代の北朝鮮を日本人が先駆的に描いた小説」として金字塔の位置にあることを確信します。

5月9日 NOFENCE 総会に寄せられた意見・感想

○ 本会を含めた人権団体が今少し、共同で協力し、活動を活性化する方向で検討願いたい（深川一郎氏）。

○ もっといろんな方が、会員でもいい、できれば若い人たちの北への考え方や印象など話を聞きたい。Web も歓迎です（山元泰生氏）。

○ 閉ざされた国の閉ざされた強制収容所、どうすると他国の人々の関心を引き寄せ、その悲惨さを我が身に、自分の事のように身近な事として置き換えるようになる日が来るのでしょうか。体制崩壊のみが唯一の道なのでしょうか（佐藤高明氏）。

○ 金正恩の異常説は本当だと思います。更にコロナ危機に医療的経済的（特に食糧）に極度に国力を低下させる北朝鮮の今後の動向に注目（牟田照雄氏）。

○ 北朝鮮における武漢コロナウイルスの流行はどうなっているのでしょうか。

金正恩の重体説の真偽が知りたいです。

彼が万一の場合、誰が後継者になるのか、朝鮮では男子が後とりになる風習でしたが、現在は女性でも継げるようになったのでしょうか（米山高仁氏）。

○ 強制収容所がなくなる日は必ずやってきます。同時に、日本の変革も求められています。真の日朝友好連帯めざして、これからもがんばりましょう（米谷嘉洋氏）。

○ 北朝鮮の文化を深く学べる活動を取り入れていくことも良いのかもしれないと考えることがありました。やはり北朝鮮で生活してきた方々から話を聞き、私に何ができるかをよく考えていく時間を取り入れていきたいと感じています（匿名氏）。

○ いつも資料を送って下さることに感謝しています。居ながら北の情勢がわかることに大変感謝しています（李貞子さん——松山市）。

いつも資料を送ってくれるのに感謝（恩智 理氏——堺市）。

5月7日27通、8日7通。計34通の中より。 ほぼ原文通り（小川 晴久）

2020 年度の会費の納入をお願いします。